

「心の目を開く」

エペソ人への手紙 1 章 15～19 節

聖学院大学 大学学務部学生課課長 岡部 剛

私には 7 歳と 2 歳になる娘がいます。いま彼女たちはいろいろな物を見て、聞いて、触って、様々なことを学んでいます。長女が 2 歳のときです。皆さんも良くご存知の「となりのトトロ」という DVD を買って彼女に見せました。私はいくつかの宮崎作品を見てきましたが、この「となりのトトロ」は見たいという気持ちにはなりません。その理由は「こどもっぽいから」それだけでした。しかし長女が誕生したことをきっかけに私にも見る機会が与えられました。私は何度か見ていて、この二昔前のほのぼのとした作品に疑問を抱き始めました。そこで幼稚園に勤めていた妻ならわかるかと思い聞きました。「これ、何が言いたいのか？」彼女は答えました。「トトロはこどもにしか見えないんだよ」それは見ればわかる。しかし、改めて見ると何とも言い難い奥深さを感じ始めたのです。当時たった 2 歳の長女は「トトロを見せて」とリクエストします。何度も何度も見せました。私も何度も見ました。大人の目にはトトロたちは見えない。しかし、主演であるサツキとメイにはそれは見えている。しかもそれは、現実にあるかのように、見て、聞いて、触れているのです。エンディングの最後ではこう歌われます。「子供のときにだけ、あなたに訪れる不思議な出会い」なぜ子供だけなのか？

この「となりのトトロ」は 1988 年、実に 24 年前の作品です。大抵その頃の CM や番組をみると「ああ昔だな」と思うことでしょう。しかし、この作品は 24 年経った今でも色あせることなく、逆に関係グッズが今でも売れるくらい内容的にも映像的にも鮮明な作品なのです。今年 2 歳になった次女もこの不思議な魅力にはまり、トトロの真似をしては楽しんでます。時の流れに関係しないこの作品の魅力を改めて実感しています。

この「となりのトトロ」という作品を通して私たちは何を読み取ることが出来るのでしょうか。先に述べたようにこのトトロのほか、真っ黒くろ助、猫バスなど所謂、お化けたちは子供たちにしか見えません。どういうわけか大人には見えません。何故でしょうか？それは、子供たちは見たもの、聞いたもの、触れたもの、すべてを何の疑いもなく受け入れることができる心の目があるからではないのでしょうか。では大人はどうでしょう。ちなみに、ここでいう大人とは何歳以上と定義づけられたものではないことを添えておきます。私たちには、目の前に何かを提示されたとき、これで本当に良いのか、大丈夫なのか、という意識が働くことはないのでしょうか。「信じられない」という思いを通すことで、初めて信じられるようになるのです。矛盾したことです。このようなことは良く有り得ることなのではないのでしょうか？「疑う」という心が芽生えたとき、私たちの心の目は閉じ始める、私にはそう感じてなりません。

本日の聖書の箇所、エペソ人へ宛てた手紙の中で使徒パウロが祈りを捧げています。「わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く

知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。」(新共同訳)私たちは神様を知り、疑うことなく心の目を開いて生活できているでしょうか？

1年前のことです。私はあるお店で長女から手紙をデコレーションするシールを指して「これが欲しい。この膨らんだシールが良いんだよね」と言われました。値段もちよっと高めです。私は彼女に言いました「こっちのキラキラシールでいいじゃん。なんでこんな膨らんだシールがいいの？」彼女は答えました。「だってこれなら目が見えない子でもわかるじゃん」私はこれを聞いて、心の目が本当に閉ざされているなあと思いました。私は、高いか安い、使いやすいか使いにくい、そんなレベルでしか見ることが出来なかったのです。今思えばトロという映画を理解できなかったのも「こどもっぽい」という閉ざした目で見えていたからだと思います。私はその後、娘の行動を見て更に気付きました。彼女は自分の気に入っているシールを友達宛の手紙に惜しみなく使っていたのです。心の目が開かれて神様の御心に叶う生活を送っているのは娘の方だな、とつくづく思いました。

もう一つ、私はこのトロに大きな魅力を感じることがあります。それは「となりのトロ」というタイトルです。なぜ「となりのトロ」なのでしょう？物語の中では「となり」である理由は明確には語られません。なぜ「うしろのトロ」ではダメなのでしょう。私たちは目の前にあるものは見えます。信じる事が出来ます。逆にうしろにあるものは鏡などを使うことでやっと見ることが出来ます。しかし、「となり」はどうでしょう。その時の意識だけで見えたり見えなかったりすることはないでしょうか？私はそのような経験を何度もしています。たとえ、それがどんなに近い存在であっても気付かない、気付くまでに時間が掛かる、それが「となり」という場所なのです。「気付かないかも知れないけれど、トロはいつもとなりにいますよ」そのようなメッセージが、このタイトルには込められているのではないのでしょうか？

私の前には聖書があります。そのうしろには聖書という鏡を通して自分らしく生きるための方向性、生き様を見出す事が出来ます。そして「となり」には、いつもそばにいて共に歩んでくださっている方がいらっやいます。これが私のイメージする信仰の形です。神を知り心の目を開く。たとえ神を知ることが出来たとしても心の目を開くこと、つまり人の心の痛みや喜びがわかる優しい目を持った人間になることは、なかなか難しいことです。これが私たちの弱いところなのです。トロは子供にしか見えません。しかし、心の目を開くことは私たち大人でも可能だと、神様はおっしゃっています。時には子どものような純粋な心に立ち返ることも、もしかすると必要なのかも知れません。御心に叶った信仰生活を送れるよう励んでまいりたいと思います。

2012年6月21日 聖学院大学 全学礼拝